

## 「經濟野話」(連載その二)

## (一) 經濟史眼の必要

「樹を見る者は森を見ず」と謂ひ、「泰山に入つて泰山を知らず」と謂ふ言葉がありますが、實際鹿を逐ふ事に夢中である従来の歴史家は、足許に何が横たはつて居るのか、之を見逃しがちであつたのではあるまいか。

私は青年の頃に、其時代に流行した西洋史を読んだ、ローマのシーザーが天下を取るのに非常に大きな借金をした事が記されて居た、つまりシーザーは借金に依つて天下を取つたのであつた。其当時此事は唯だ一つの偉人の逸話として考へたが、今にして思ふとシーザーは經濟力の偉大さを利用して当時の人心を風靡したのである。實際彼は世人の考へて居る様な戦争の上手な人ではなかつたけれ共、人心を収攬する事に於ては、大きな人格上の力を持つて居た。然しながら此点もよく考へて見ると、彼の偉かつた点は社会の底力となつて、其奥深く流れるものを捉へた事である。語を換へて言へば經濟力の人心を支配する、其実体的な力を認めて、之を甘く利用した点である。ナポレオンは確かに世界の歴史を通じて戦争の上手な名将であつた。

義があるのであろう。それは丁度櫻は何月に開くかと謂ふ問題と同じ事である。内地では梅、桃、櫻と二月から順次に咲くが、北海道では梅、桃、櫻が五月に一度に咲くという比較論と同じ事である。どちらであつても宜しいのである、又どちらも事実である。

象と謂ふ動物は、吾々の子供の時から巨大なものとして考へられて居たものである。今若し盲者が、其鼻や、足や、尾だけを手さぐりして何うして其象の大きい事が判るであろうか。部分の研究は必要である、部分をはつきりと知悉する事は学問の研究の過程に於て重要な事である。然し茲に一つの誤謬があるのではあるまいか、部分は全体の部分である、部分を綜合して全体を見る事に於ての一過程である、そこで初めて意義があるのではあるまいか。

歴史上の一つの事件、それは確かに研究に價する。然しそれは其社会生活の全体の一つの表はれである、一つの事件に過ぎないのである。其一つの表はれのみを以て、全体を見逃がす事は、何うしても間違ひである。例へて謂へば英雄が社会を作るのか社会が英雄を作るのか。之に對し私は疑もなく時代と社会が英雄を作るのである事を信ずる、従つて英雄の傳記の歴史を以て、満足する事が出来ない。其時代と社会とを知らなければ、本末を顛倒したものと考へる。源を知らずに末を知つただけでは、善く其何物たる事を知る事は出来ないではないか。

然しながら、私は更に斯く考へる。其形を作つた時代と社会とを考へただけでは、未だ眞に其時代の実体を突きとめたと謂ふ事は出来ないと思ふ、何んとなれば其時代、其社会に流れる、一つのアンダーカレントがあるからであつて、此潜在的に流れる、根強い眞の力を認めずに、色々な議論をする事は、前述の本末顛倒論と同じ様に、間違つて居ると思ふのである。

然し何故に彼がロシヤ遠征に失敗したのか、彼の暗い悪い運命の糸口をあの一戦に作つたのか。之は一口に云へば、經濟上の援助が無かつたからである。当時のフランスのブルジョアが擧つて反動的の行動に出たのみならず、經濟上の援助を惜しんだからである。彼はモスクワでは決して戦争に敗けたのでは無かつた、寧ろ到る處で戦争には勝つたのである。戦争では常に勝利者であつたのである。然るに遂にコルシカ島に追ひやられたと謂ふのは、經濟力と謂ふものの、援助を得る事が、今迄の様に充分で無かつたからであつた。

## 一一

従来我國の歴史家は、餘り經濟とか、通信とか謂ふものに就ては説き及んで居なかつた、有名な日本外史だつて、それは戦争の歴史に過ぎないのである。歴史家は殆んど總て政治の歴史に非ざれば、戦争の歴史を叙説した、若し然らずとすれば、英雄偉人の傳記である。

源平壇浦の海戦は何年何月である、其の戦争は何處で行はれた、其戦争には何萬何千の兵隊が居つた、大砲が幾つあつた、其時の大將は誰と誰とであつた、更に之を詳しく述べる人は、其大將の生れは何處の國であつた事までを附け加へる。政治の歴史に於ても同様である。何の某が誰と結托した事とか、何れの主張に賛成者が多かつた事とか、先づ通じて言へば戦争と政治の歴史の力説である。

なる程戦争とか、政治とか謂ふものは、人類の歴史に於て重要な出来事には相違ない、重大な事件であらう。然し、其戦争の年月日がどこらに違つても、其時の大將が何處の生れであらう共、又其時の兵隊の数が一桁違つても、それが吾々の歴史に何れだけの必要があり、意

或る史家はこのアンダーカレントを時代精神とか、時代の風潮と謂ふ言葉を以て説明して居る。然しながら、私は此点に就ても斯く考へる。時代精神とか、時代の潮流とか謂ふけれ共、其流れに一つ根源が在ると信ずる。河に源があるが如く、其潮流には出发点がなければならぬ、流の源が存在するのに違ひないと思ふ。

抑々人類の歴史を、其何千年の昔へ遡つて考へて、衣食住と謂ふ問題を離れて、何處に生活の歴史があるであろうか。人類の歴史に於て經濟行爲を離れて、經濟生活を除いて、何處に其歴史が考へ得られよう。私は思ふ、經濟生活と謂ふものが、眞に人間を動かした力であつて、人を動かすものは決して權力ではなくて、經濟力である。政治の歴史や、戦争の歴史に於て現はれた人間の争の歴史も、畢竟此經濟の力が、人間の本能的に表はれた一事例に過ぎないので、總ての源は、人類の生きんとする努力の根強い力を成す、この經濟行爲が形成して居るものであると信ずる。人類の文化と謂ひ、善政悪政と謂ふ、總て之等の歴史上の問題は其時代の經濟觀念を前提とせずして論議する事は不可である。少くとも源を究めての議論ではないと思ふ。

## 一二

上古原始時代に於ける民族は、其自然の與へる儘に總てを享樂した。故に此時代に於ては、物資を蓄積すると云ふ觀念は少く、従つて現代の意味に於ける資本とか、金利とか云ふ様なものはなく、其經濟組織は頗る簡單であつた。畢竟古代に於ける人類の經濟生活は、自然の與へる限度を標準とし、自然の儘に其生活の資料を取り、そこに人類の繁殖を試みたのであつた。



我國の歴史を繰り擴げて見て、尤も著しく文化の榮えた時代は飛鳥朝、奈良朝の時代であつた事に一致するであろう。實際此時代は單り美術史、芸術史の上からのみでなく政治上に於ても、比較的よく治まつた時代で、日本が民族的に融和を終へ王朝の基礎が確立した時であつた。畢竟此時代は我國の黄金時代であつたのである。

然し翻つて考へて、何故に此時代が斯く平和で、然かも芸術の百花繚亂時代を演出したかと云ふに、それは此時代に於ける経済社会に安定があつたからである。換言すれば此時代の経済組織は比較的餘裕があつて、衣食住の問題に迫られる事が少かつたから、國民は新しい外國の高い文化を自由に吸収する事が出来、又政治に對しても、経済上の基礎があつたから、割合に不安を抱くのが無かつたのである。奈良に大佛が出来たり、諸國に國分寺を創設したり其輪奐の美を盡した偉大な建築や、多くの不朽の彫刻品を残す事の出来たのは、結局其時代の人々が、衣食住に迫られる事が無かつたからで、其證據には、王朝の末には、人口の増殖に因る、経済社会の行き詰りの爲めに、世の中が亂れ出した事から考へても、甚だ明白ある。

尚ほ王朝時代の時半に、度々遷都の行はれた事は、それは表面は政治上の理由から行はれたものであるが、其實際上の理由は、此時代の経済上の實權を握つて居つた、商工業者の希望に依つて行はれ、其勢力に依つて左右せられた結果であつて、此点に就ては既に一部の史學者の間に着眼せられ、研究せられた所の如くである。

#### 四

源頼朝という人は、中々計數に明るい人であつた。それで彼はよく

寧ろ其時代の多數の武人共は、自己に利益を以て誘つて呉れる北朝側になびいたので、足利方は常に大兵を擁し、多衆の勢を以て之に当たつたが故に、南朝方は、個人的には強くても、大勢に押されて、到る處に勢がせばめられてしまつたのである。あの尊氏が京都で敗れて、命からがら逃げのびて九州に走つた時は、彼に従ふ兵士は數人に過ぎなかつた。然るに彼が數年にして、十萬とか、二十萬とかいう大兵を率ひて、京都に攻め上つて来たのは、實に彼が経済の人心を動かす、其人情の機微を捉え、利を以て誘つたからである。

北畠親房は南朝に於ける學者であり、又此方面には相當の識見を有し、経済的方面から、南朝の威信を高めんと試みた人であつた。然し、惜しい事には其説が充分行はれない中に死んでしまつたのである。畢竟南朝方の敗れた事は我國史を読む者をして、何とかして之に克たせたかつた感じのするのであるが、社会の原動力たる経済的に對し徹底的な信念を持つた者が無く、尊氏の如く、巧みに人心の機微を察し、多數の味方を得る事に努力しなかつた事は、遂に孀子の名を成さしむるの結果となつたもので、返す返すも残念な事である。

「武士は喰わねど高楊子」といふ言葉がある。世人往々之を以て徳川時代の武士氣質の典型であるが如くに説明する。然し、之は間違つた見方で、それは経済思想の無い、片意地な一武弁の言葉であつて、國の大策を按ずる爲政者の考でもなく、又此言葉が其時代を流れる根強い力でも無かつたのである。

要するに経済力と謂ふものは、吾々人類の歴史が始まつて以来今日に到る迄、各時代を通じて一貫した、強い流れであつて、今迄の史家が躍り出た役者のみに眼を注ぎ、其背景たる舞台を閉却し、更に其舞台を編成するに至つた、潜在的力を雲煙過眼視したのは、全く間違つ

通信連絡による、團結の必要を認めて居たのである。故に彼が伊豆に兵を擧げた時には、京都で義經が起こり、木曾で義仲が旗を擧げた、そして、各地の源氏は之に相響應した。蓋し之は頼朝が平素から、内密によく各地の源氏と連絡を取つて居つたからで、此時代の様な交通機關の不便な時に、之を甘くやつた事が彼の天下を取つた所以であらう。

頼朝は鎌倉に幕府を開いてから、先づ各地の莊園を整理した。彼は名を去つて実を取り、経済上の力が人間の心を支配する人情の機微を洞察して、茲に、経済上の實權を握つて諸侯を統治するの策に出たのである。つまり彼がよく天下を治め、人心を収める事が出来たのは、経済上の關係を根強く設けた事に因るのである。

#### 五

南北朝の戦争は我歴史を通じて悲憤と紅涙の物語である。花よりも軍書に悲しき歴史である。然しながら、其南風の競はなかつた原因は何處に在つたのであろうか。あれだけ南朝方には大義名分があり、其正統なる旗印があり然かも楠正成とか、新田義貞とか、北畠親房とか、名將忠臣が可成多く其陣を固めて居つたのに拘はらず、唯足利兄弟に敗れたのは何故であつたか。私はかく思ふ、其敗因は色々考へる事が出来るであらうが、然し其一番の原因は南朝側が、常に大義名分のみに拘泥して、人間の心のほんとうに動くものは、何によるかと云ふ事を考へなかつたからである。詳言すれば南朝側に與した人々は皆誠忠の士で、一以て十に当るだけの氣概で奮戦したのであつた。然し、大聲は耳に入らずで、其下に從ふ者には大義名分が充分に呑み込めず、

た事であつて、踊る役者の巧拙や、その生ひ立ちは、事の枝葉であつて、人類の眞実の歴史とは大した關係も無い事である。

— つづく —

